

最近における敦煌石窟の研究

長 廣 敏 雄

【要旨】一九四二年ごろから中国の学者たちが、つきつきに敦煌石窟調査をおこなったが、中日戦争がおわり、一九五〇年中国人民解放軍が敦煌を解放してからは敦煌美術研究所が改組されて、一九五一年敦煌文物研究所が設立された。従来はペリオ探險隊の發表した敦煌石窟の図版やその石窟編号が標準であつたのに対し、新調査と新研究とはまづたく基本的な土台をつくりつつある。これらの業績を紹介するために、本文を草した次第である。

はしがき

一九〇〇年（光緒三十三年）に道士王圓箴なるものが、一石窟中におびたらしい経卷、文書、絵画などの文物を発見したのがきつかけとなり、一九〇七年以来、英のスタン卿、仏のペリオがこれらの文物をそれぞれ母国へもち帰り、清朝政府はあわてて保存に着手し日本では大谷探險隊が一部の文物を將來したことは、東洋学界における二十世紀初頭の大事件であつた。こうして発足したいわゆる敦煌

学の諸研究が今日までさまざまの貴重な成果をあげていることは、いまさらいうまでもない。しかるに敦煌石窟それ自体の調査研究については、今日までペリオの出版した六冊の図録 *Mission Pelliot, Les Grottes de Touen-kouang*, 6 Tomes, Paris 1920—24 及びスタインの大著 *Serindia* 4 Vols., Oxford 1921 第二卷第二十一章の記述に足場をもとめ、陳万里「西行日記」（民国十五年）や大谷探險隊の「西域記」（昭和十二年）などによつて補足する程度の知見をうるにとどまらざるをえないのであつた。けだしペリオは

図録の出版にとどまり、その調査報告はついに刊行をみなかつたし、スタインの調査は石窟のごく一部分にすぎなかつた。陳万里は写真を全く欠いた旅行記であり、大谷探險隊もおなじく簡単な旅行記である。

このような状態のまま放置せられて、敦煌石窟に五十年の歳月がながれた。中国辺疆のこの靈跡は心なき *treasures* (古物あさり) どもの抜けがけの功名を發揮させる場所ではなかつたのである。一九四四年になつて中国国民党政府は敦煌藝術研究所を開設し、組織的な調査のスタートをはじめて中国人自身の手によつて開始され、主として敦煌石窟壁画の模写をおこない、あわせて石窟と附近古蹟文物の保管がすめられた。中日戦争がおわり、一九五〇年中国人民解放軍が敦煌を解放してからは、敦煌藝術研究所は西北軍政委員会文化部文物処の接収するところとなり、翌一九五一年には改組され、組織を拡大してここに敦煌文物研究所が設立された(文物參考資料第二卷第五期一九五一年刊)

敦煌石窟研究がいまや、まったく革新的な段階に移つてゐることは否定しがたい事実である。われわれはこのあ

らしく歩調をとりはじめた敦煌研究の経過を詳細に知りた
いとのだみ、またわれわれの中国美術研究がこれによつて
如何に促進され、展開されるべきかを反省したいとのぞん
でいる。しかし今日までのところ、新興中国からわが国に
輸入せられた關係文献は僅小であり、それによつて知りう
る調査と研究の範圍はごく限られている。私が以下に叙述
するものも、この限られた文献に依つているのであるが、
この際、私が強く希望したいことは新興中国の學者諸先生
がわが国の美術史學者たちにも協調の勞をとつて頂きたい
ことである。學術の發達にとつて學者の孤立化はもつとも
避けねばならず、誤解の排除はなにを措いてもまず実行さ
れねばならぬからである。

—

一九五一年敦煌文物展覽会が北京において大々的に催さ
れ、それを機会に「文物參考資料」第二卷は第四期、第五期
(一九五一年四月および五月北京發行) の二冊を敦煌文物展覽
特刊として発行した。新中国の敦煌石窟研究がこのときは
じめて明らかとなつたようである。これに掲載された論文

や報告は左のごとくである。

- (1) 向達「敦煌芸術概論」(第四期第三七―四五頁)
- (2) 關文儒「莫高窟の石窟構造及其塑像」(第四期第一四〇―一七八頁)
- (3) 向達「莫高・榆林二窟雜考」(第五期第七六―九五頁)
- (4) 宿白「敦煌莫高窟中の『五台山図』」(第五期第一頁―)
- (5) 宿白「莫高窟大事年表」(第五期第二二二―二二七頁)
- (6) 莫高窟各家編号対照表(第五期)

この報告のうちでまず注目されるのは、石窟編号がまつたく新規にあらたまつたことであろう。従来行われた編号はペリオ番号、スタイン番号、陳万里「西行日記」中に発表した敦煌県署番号、張大千番号があり、ペリオ番号以外はほとんど顧られなかつた。ペリオは一九〇七年石窟群の南より番号を附して一八二をかぞえたが(略号をPとする)、なおアルファベットを以て同一番号を細分している。敦煌県署は北よりかぞえて三五三にいたつてゐる。一九四四年以来、現地におかれた国立敦煌芸術研究所の張大千が附した番号(略号をCとする)は三〇九である。これに対し一九五一年、改組された国立敦煌文物研究所がかぞ

えた(略号をAとする)番号は四六九にのぼつてゐる。このA番号は中國の公定であつて各石窟にはそれぞれ番号札が張りつけてあるらしいから今後はこのA番号に当然従わねばならなくなるはずである。現に上記の諸報告はこの番号を用い、便宜的にP番号(ペリオ番号)を附記している。上掲、「莫高窟各家編号対照表」はA番号、C番号、P番号の三つを対照して研究者の便に供したものであるが、さらにその表には各窟の推定年代が、魏、北魏、西魏、隋、初唐、盛唐、中唐、晚唐、五代、西夏、宋、元、清、民初という断代の名称で評価されてゐること、また各朝代表窟は○を以て、重要でない小窟は△を以て、研究所新発見窟は●を以て特に注意してある。いま代表窟とされているものを左に引いてみよう。

A〇〇三(P一七一A)	元	A〇一七(Pなし)	晚唐
A〇三六(Pなし)	中唐	A〇五五(P一一八F)	宋
A〇六一(P一一七)	宋初	A〇八五(P〇九二)	唐
A〇九八(P〇七四)	五代	A一〇〇(P〇六六)	五代
A一〇八(P〇五二)	五代	A一一二(P〇四六)	中唐
A一三〇(P〇一六)	盛唐	A一四八(P〇一〇)	晚唐

A一五六 (P一七Bis)	晚唐	A一五八 (P〇一九Bis)	中唐
A一五九 (C〇二Bis)	晚唐	A一七二 (P〇三三)	盛唐
A一九四 (P〇五一E)	中唐	A一九六 (P〇六三)	晚唐
A二〇五 (P〇七)	盛唐	A二〇七 (P〇七五A)	西夏
A二一七 (P〇七〇)	盛唐	A二二〇 (P〇六四)	初唐
A二四九 (P一〇)	魏	A二五四 (P一〇五)	魏
A二五六 (P一〇七)	宋	A二五七 (P一〇)	魏
A二七二 (P一八J)	北魏	A二七五 (P一八m)	北魏
A二八五 (P二〇n)	西魏	A二八八 (P二〇P)	魏
A三一九 (P一三七〇)	盛唐	A三二一 (P一三九A)	初唐
A三二八 (P一四三)	宋	A三九〇 (P一五〇)	隋
A四二〇 (P一三六E)	隋	A四二八 (P一三五)	魏
A四四四 (P一二〇z)	初唐		

これらの推定年代がどんな根拠から定められたかは、私
たちにとつて最も興味ふかいし、また重要な論点となるも
のであるが、表にはむろんその説明はしるされていない。
また私が参考しうるペリオド録は敦煌石窟のごく一部分の
写真しか示していないのだから、この推定年代を確めてみ
る手段としてはきわめて弱い立場にある。この点は中国学
者の将来の発言を期待するほかないであらう。

二

石窟の年代観を知るための有力な資料は、かつて向達の
論文「西征小記」(国季刊第七卷第一号一九五〇年七月)に
よつてあたえられた。彼が一九四二年春、国立中央研究院
の西北史地攷察団に参加して、同年九月蘭州、十月武威、
張掖をへて敦煌に至り、千仏洞に仮泊すること九ヶ月、一
九四三年一月に現地で執筆、翌四四年ふたたび敦煌に滞在
して加筆したものが、この論文である。当時、張大千の敦
煌調査のあとであつて、張氏の窟番号が行われていたので、
向達はC番号とP番号とを併用している。この論文では諸
窟の壁面のなかに墨書の題識が発見されたことをのべてい
るのが貴重な貢献である。これを左に引用してみよう。

(1) P一三一 (C八六) 北壁壁面に磨滅した発願文があ
る。「時正光□年」(西曆五二〇—五二四)の諸字がみとめ
られる。この北魏の年号は敦煌石窟中もつとも古い。

(2) P一二〇n (C八三) 北壁発願文中に西魏大統四年及
び五年(西曆五三八、三九)の年号がある。この発願文はよ
く残つてゐるが、一部分は惜しくも刀子で截りとられてい

る。

(3) P 一三七 a (C 九四) 中央方柱北面座に隋の開皇四年六月十一日(西暦五八四)の発願文がある。

(4) P 一三七 d (C 九六) 北壁壁画に隋開皇五年正月(西暦五八五)の発願文の残欠がある。隋の年号は以上二窟だけである。

(5) P 六四 (C 二七〇) 北壁壁画下方に小牌子がつくられ、唐貞観十六年歲次壬寅奉為天雲寺律師道弘……の題記(西暦六四二)がある。また門口楣上に□玄邁造像記があり文末に唐貞観十六年(西暦六四二)の紀年がある。この石窟は翟家窟と名づけられている。道弘、玄邁はともにその姓を翟といつたらしい。唐の年号の最古である。

(6) P 一二〇 (C 二一五) 窟外の飛簷上に大字朱書で貞観廿二年(西暦六四八)陰仁本云々の題記がある。貞観の年号は以上三である。

(7) P 一四九 (C 一三七) 門口楣上に則天武后時代の垂拱二年(西暦六八六)の発願文がある。おなじく北壁壁画維摩變には武后時代の張恩芸造維摩變の發願文の下半が残っており、張恩芸の姓名の上方に「聖曆」(西暦六九八―九九)

の二字がほぼわかる。

(8) P 二八 (C 二六) 仏龕に發願文がぼんやり残り、文末に「万歳三年」の諸字がみとめられる。天冊万歳(西暦六九五)、万歳通天(西暦六九六)はともに一年のみだが、果してどちらの年号であろうか。いずれにしても則天武后時代の年代では以上三のこつている。

(9) P 四一 (C 二八九) 仏龕南菩薩像の側に「清信弟子張承慶為身染患發心造二菩薩天宝七載五月十三日畢功」(西暦七四八)の題記がある。おなじく南壁觀音像の側に年号はわからないが「觀世音菩薩弟子闍白榮奉為慈親養中隔別敬造」の題記がある。沙州が吐蕃の手に陥つた時代にこの窟が重修されたことを語るものである。

(10) P 四二 (C 二八七) 仏龕北の菩薩像上に「天宝八載四月廿五日書人宋承嗣作之也」の題記(西暦七四九)がある。

(11) P 一五六 (C 一八六) 南壁壁画の剝落したところに「上元二年」の紀年銘が書かれている。壁画から推察してこの年号は高宗朝の上元ではなく肅宗朝の上元とみており、そうすれば西暦七六一にあたる。

(12) P 一六 (C 二〇) 咸通七年三月廿八日魏博弟子石弘載

及浙江東道弟子□□□という題記（西曆八六六）があつたが張大千が切りとつて敦煌芸術研究所に寄贈した。窟内のもとの場所は不明。開元時代、樂庭瓊がこの窟をひらいたといわれ、右の咸通の題記は重修時のものだろうとされている。そうすると樂庭瓊の造像記があるのではないかと思ふが、發表されていない。

(13) P 五〇a (C 二八五) 仏龕に咸通十三年（西曆八七二）の發願文がある。唐代の年号は以上十一である。

(14) P 五一c (C 二八三) 門口楣上に□仏讚文があり、文内に「河西節度使張公稱」とあり文末に「歲次癸亥」とある。壁画が晚唐風であることから推して、節度使張公は張承奉、癸亥は唐末の昭宗の天復三年（西曆九〇三）であろうといつてゐる。果してそうとすれば、これは唐の最晩の年号となる。

(15) P 九六a (C 六一) 窟外に五代後梁の貞明五年（西曆九一九）造像記残片がある。

(16) P 一五五 (C 一八七) 仏龕の發願文には五代後唐の清泰甲午（西曆九三三）の紀年がある。しかしこれは隋窟であるから、紀年は重修のときのものとして推定してゐる。

(17) P 一三六n (C 二〇三) 仏龕に五代後晋の天福□年發願文（西曆九三六—四三）がある。この窟も隋窟であり、發願文は重修時のものである。

(18) P 九九 (C 六五) 東壁に五代後漢乾祐三年（西曆九五〇）の發願文がある。

(19) P 二六 (C 二五) 窟外門口楣上の發願文には「大周広順七年」の紀年があり、「七」の字は明瞭でない。後周の広順（西曆九五—五三）には七年がないから「三」とすべきかも知れない。窟は初唐の造営とみられるから、これも重修時の紀年である。

(20) P 一三六 (C 二二二) 窟外の簷上に乾德八年曹元忠修の題記がある。宋の太祖の乾德は五年までであるから、これは開宝三年（西曆九七〇）にあたる。この窟は隋窟であるから、曹元忠は門口および窟外の簷を修したものである。

(21) P 一三〇 (C 二二四) 窟外の簷に宋の太平興国五年曹延祿之世闍員清が修したと題記されている（西曆九八〇）。

この窟も隋窟であり、初唐重修、闍氏は窟簷を修したのである。

(2) P 一二〇 Z (C 二二四) 窟外の簷に宋の開宝九年曹延恭之世所修のことが題記されている。開宝九年はすなわち太平興國元年(西曆九七六)である。また簷外北壁に太平興國三年(西曆九七八)および慶曆六年(西曆一〇四六)宋人の題名二則がある。しかし、この窟は初唐窟である。宋代の年号は以上五である。

(2) P 九六 c (C 六三) この石窟の西龕壁上に南北朝、宋元嘉二年(西曆四二五)の題記があり、かつて陳万里「西行日記」(民国十五年刊)が指摘している。しかし向達はこれは近人のらくがきであると否定している。この石窟は晚唐窟であり、塑像は全壊しており、壁面は粗雑でとても六朝の風はないこと、また敦煌の六朝窟は一般に第二層、または第三層に位置するにかかわらず、この窟は最下層にあること、これらの理由もあげて彼はこの題記が近代の贋作であることを主張している。

(2) P 一二八 (C 一一〇) 佛龕北壁上に南北朝、梁大同八年(西曆五四二)の題記があるがこれは敦煌の任子宜なるひとの落書であることを、向達が注意している。

以上は向達のあげた紀年ある題記の全部であるが、この

ほか敦煌の歴史を考えるのに貴重な固有名詞をもつ、いくつかの題記についても論じられている。唐の天宝の乱以後百年あまりに互り吐蕃に占拠された事情、その後大中の初年から張議潮が勢力をふるつた事情、これらが窟内の題記によつてかなり明瞭にされている。いまはこの点に深入りすることをひかえたい。

三

敦煌石窟における墨書の題識については、この向達の論考と前後して、何王璜「敦煌莫高窟現存仏洞概況之調査」(説文月刊第三卷第十期、一九四三)と史岩「敦煌石室画像題識」(一九四七)の二著が発表せられたらしい。私は残念ながらこれらをまだ披見する機会にめぐまれていない。この二著中に既に発表せられたもののうち、注目すべき一題記「莫高窟記」はさいわいに宿白「莫高窟記跋」(文物參考資料一九五五第二期)にその全文が発表された。この題記は A 一五六 (P 一七 Bis) 窟前室北壁上方に墨書されており、十行からなり、晚唐人の書だといわれるが、墨跡はすでに沙ですれて脱落が多い。この窟後室北壁下部には有名な壁画

「張議潮收復河西圖」があり、南壁下部には「宋国夫人出行図」すなわち張議潮夫人の図がえがかれている（ペリオ図版四三—四八）。ペリオ文書第三七二〇号の卷子にはまた別に莫高窟記があり、これは王重民が「歴史研究」（一九五四第二期）に全文を発表している。宿白の上掲論考ではこのペリオ文書と窟内題識の「莫高窟記」とを併記し、これが同一の文であることをつたえている。窟内題識では文末の紀年は文字が消えて、わずかに「五日記」がのこるだけであるが、ペリオ文書によれば、

従初窟至大歴三年戊申即四百四年又至今大唐庚午即四百九十六年時咸通六年正月十五日記

とある。したがつてこの文は唐の懿宗の咸通六年（西歴八六五）にしろされたことになるのであるが、その上に「今大唐庚午」とあり、咸通六年は乙酉であり、相矛盾する。庚午の年は大中四年（八五〇）である。またその上の文に大歴（曆のあやまり）三年戊申（七六八）とある。文によつて、これから四百四年さかのぼると前秦建元元年（三六五）の一年前となる。さてこの西歴三六四に四百九十六年を加えると、咸通元年（八六〇）庚辰の年にあたる。そうであるなら

ば、題記に庚午とあるのは庚辰の誤で、咸通六年は元年の誤とみるはかはない。ただし四百九十六年の九を八の誤りとすれば大中四年（八五〇）庚午が正しくなるがいまは咸通元年をとりたいというのが王重民の考証するところである。仮りにこれにしたがつておく。

この「莫高窟記」の内容は宿白の上掲論文で検討をくわえられている。第一は石窟の淵源の問題である。かつて羽田亨博士はペリオ文書二六九一号沙州地誌断簡に

従永和八年癸丑歲創建窟至今大漢乾祐二年己酉歲嘗得五百九十六年記

とあるのから考証されて、乾祐二年からさかのぼること四百九十六年前、永和九年（西歴三五三）癸丑八年を敦煌石窟の最初の開鑿と論定された。これは十世紀中葉、五代後漢の文書であり、莫高窟記は九世紀中葉、晩唐の文書である。後者によるとその巻首に

秦建元中有沙門樂傳杖錫西遊至此、遙礼其山、見金光如千仏之状、遂架空鑄巖大造窟像

とあり、前秦符堅の建元年間（三六五—三八四）の樂傳創建説がふたたび重きをなすようにみられる。ふたたびと敢えて

いうのは、この説はすでに知られるごとく、唐の則天武后時代聖曆元年（六九八）に建てられ、A三三二（P一四六）窟内に近年まであつた大周李君修功德記碑の記文、

莫高窟者、厥前秦建元二年有沙門樂傳……………

……………行至此山、忽見金光、狀有千仏、……………

造窟一畵

の文により、古くより建元二年（三六〇）樂傳創建説があつたが、これを踏襲したにすぎないからである。莫高窟記はそのほか、一つの矛盾した記事をもべている。それは文の中間、法良禪師が樂傳窟の側にまた一窟をつくり、結局、敦煌の伽藍建營はこの二僧にはじまると記したあとで

晋司空索靖題壁号仙巖寺。

という文を入れている。宿白が論ずるように索靖は敦煌の名望家であり、晋惠帝の泰安末（三〇三）に河間王頤を討ち、傷をうけて卒していることが晋書卷六十索靖伝にみえてゐる。しかるに泰安末は前秦建元よりは六十余年以前にあたるのだから、樂傳創建よりははるか以前の事蹟であるにわかかわらず、記事は後に記されている。この索靖の記事は前掲の李君碑には欠けていることからしても、うたがうほか

はない。

四

「李君修功德記碑」によれば、樂傳ののち法良禪師が石窟を營建し、ついで北魏の建平公、東陽王の造營があり、北周隋唐にかけてますますさかんとり、則天武后の聖曆元年（六九八）には窟室の数が一千余にいたつたという。この情況は晩唐にいたつて絶頂に達し、あらたな造營よりも旧窟の改修の方が多くなつたらしい。しかし、だいたいは四世紀から十三世紀まで營建がつづいたと考へて誤りはなからう。

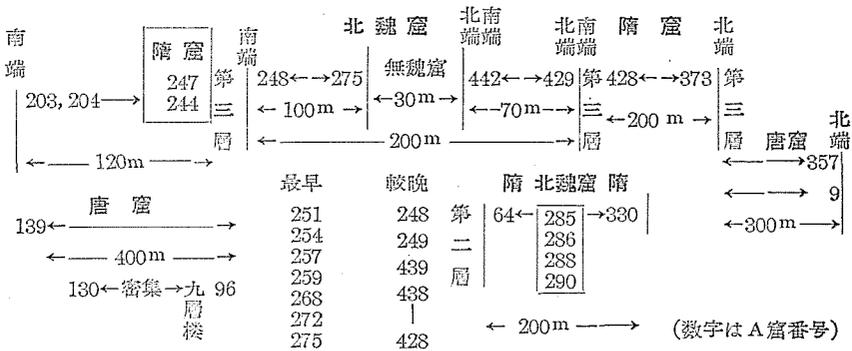
石窟の現状については陳明達が執筆した「敦煌石窟勘察報告」（文物參考資料一九五五年第二期）にくわしい。これは趙正之、莫宗江、宿白、余鳴謙の四氏が調査したものをまとめたものらしい。これによつて次に述べてみよう。

全長約一六〇メートルのうち、南区一〇〇メートル、北区六〇〇メートルに分かれる。北区は窟がすくない上に小窟である。石窟は上下にかさなり、三層をなすところが少くない。一般に北魏窟は上層、晩唐五代の窟は下層、な

お一部はまだ沙中に埋れている。

開鑿が千年にわたり、石窟と尊像と壁画とが修理につぐ修理の結果錯雑するので、石窟の編年はむづかしい。たとえば五代窟P六六(A一〇〇)は盛唐窟P六六a(A二一六)の床面をこわしてつくられ、唐窟P一一七B(a)(A二六三)の宋代壁画のしたから魏式の仏龕、塑像が発見された。現在判明している限りでは、魏窟二二、隋窟九六、唐窟二〇二、五代窟三三、宋および西夏窟は一〇一、元窟九、清窟五、時代不詳六であるという。

いわゆる草創窟たる樂傳窟、法良窟の所在は不明である。しかし一九五一年中国学者の調査の結果、現在のA二七五窟(P一一八m。北魏窟)附近の岩面に宋以前の崩壊箇所があり、このあたりではないかと想像されている。北魏窟乃至北朝窟は中央南に偏した約二〇〇メートルのうちにあり、大部分は第三層にある。南のA二四八(P一〇一〇)メトルと、A四四二(P一二〇S)からA四二九(P一三五)にいたる北區約七〇メートルがこれであり、その中間三〇メートルには北魏窟はない。このうちA二五一



(P一〇三)、A二五四 (P一〇五)、A二五七 (P一一〇)、A二七二 (P一一八J)、A二七五 (P一一八m)の諸洞は早期のものであり、これから左右にのび、A二四九(P一〇二)、A四三九(P一二〇n)、A四三八(P一二〇b)、A四二八(P一三五)の諸洞は晩期のものである。この年代推定には前掲の紀年窟、すなわち北魏正光年のA二九〇(P一二一)洞、西魏大統四年および五年のA二八五(P一二〇n)洞が據りどころに

なるのはいうまでもない。

隋窟は魏窟群の南北にひらかれている。まず魏窟A四二八(P一三五)洞に接するA四二七(P一三六)洞から北にのびてA三七三(P一六〇g)洞にいたる第三層群は約二〇〇メートルの地域に互つてゐる。第二層群ではA二八五(P二二〇n)、A二八六、A二八八(P二二〇n)、A二九〇(P二二一)などの魏窟を中心として、北へはA三三〇(P一四四b)にいたる諸洞、南へはA六四(P一一六)洞にいたる諸洞が隋窟である。これに対して第三層魏石窟の南では、A二四七(P九七a)、A二四四(P九五)の二窟しかみとめられなく、はるかに隔てること約一二〇メートルの初唐、盛唐の窟群中にA二〇三(P六七)、A二〇四(P六九)の隋窟がある。このうち紀年のあるのは開皇四年のA三〇二(P一三七a)、開皇五年のA三〇五(P一三七d)の二窟である。

唐窟は隋窟の南北にのびている。北区三〇〇メートルでは第二層、第三層の北端にそれぞれA三五七洞、A九(P一六七)洞がある。南区四〇〇メートルでは南端がA一三二洞であり、このあいだに唐窟がならぶわけである。特にA

一三〇(P一六)洞からいわゆる九層樓A九六(P七八)洞までの地区には唐窟が密集している。紀年銘は、貞觀十六年のA二二〇(P六四)洞がもつとも古く、ついで貞觀二十二年のA四三二(P二二〇)洞、垂拱二年と聖曆年のA三三五(P一四九)洞、万歳三年のA一二三(P二八)天寶七載のA一八〇(P四一)洞、天寶八載のA一八五洞(P四二)洞、肅宗上元二年のA三八六(P一五六)洞、咸通七年のA一三〇(P一六)洞、咸通十三年のA一〇七(P五〇)洞、天復三年のA一九三(P五一c)洞がある。

「敦煌石窟勘察報告」は石窟遺址を綜体的に調査しようと思ひしそれを報告した点で、すぐれた報告である。まず(一)敦煌の自然環境が石窟にいかにか影響しているかを、氣象、岩層、風沙、水流などの項目に分けて記述している。ついで(二)各洞の損傷概況を写真および実測図により説明、岩層の崩壊または亀裂、各窟間の相互侵犯の情況、後代の破壊と補修、石窟の閉塞の事情、壁面の損傷、塑像の損傷を各項目別に述べている。くわしくはここに再録する余裕がないが、例えば現在の塑像についてみると、魏二六八、隋四

四四、唐六六一、五代三六、宋二二五、西夏五、元八、清六三一で、総数二二七八となる。ただし、もとのままを完全に保存するものは魏二三六、隋二四二、唐二三五、五代一一、宋五四、西夏五、清六三一、総計一四一四である。

以上、走り書の程度で紹介した最近の新研究と報告とは、敦煌石窟に対する中国学者の関心がきわめて大きいことを察知せしめるものである。これらはまだこの大遺跡の歴史の意義を解明するほんの端緒であることも事実であろう。美術史的にみて、塑像や壁画の細密な観察はすべて今後のことに属するともいえよう。二十世紀初頭の敦煌調査は一方では貴重資料の埋滅を防いだという功績もあつたが、他方では多分に *treasure-seeker* 宝探しという非難から免れなかつたのである。いまや、中国学者が自国の文化財を保護しようとする強い決意と熱心とを以て、困難な調査に着々成果をあげつつあることに敬意を表して、この稿を終りたい。

執筆者紹介

小畑 龍 雄	山口大学助教授
富岡 次 郎	京都大学大学院特別奨学生
長 廣 敏 雄	京都大学教授
直木孝次郎	大阪市立大学助教授
室 賀 信 夫	前京都大学助教授
田 中 裕	京都大学講師
北村 敬 直	大阪市立大学助教授

Recent Studies on Touen-houang (敦煌) Cave-Temples

by

Toshio Nagahiro

Chinese scholars not infrequently visited and investigated the Touen-houang Cave-Temples since around 1942 even during the latest war. Now the war was over and, after the new government took over the site in 1950, Touen-houang Institute of Arts (敦煌藝術研究所) was reformed into Touen-houang Institute of Arts and Crafts (敦煌文物研究所) in 1951. Up to the present, the figures and the numbering published by Mission Pelliot, in *Les Grottes de Touen-houang* (6 Tomes, Paris, 1920-24), have been the foundation for various studies of this site. However, recent researches are newly building a very significant foundation for future studies. This article intends to introduce these quite recent achievements in China.